

## 幼児の発達援助に関する視点に及ぼす臨床心理学的な知識と実践経験の影響

五位塚, 和也  
九州大学大学院人間環境学研究院

山田, 悠未  
九州大学大学院人間環境学府

古賀, 聡  
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/1911204>

---

出版情報：九州大学総合臨床心理研究. 8, pp.3-14, 2017-03-15. 九州大学大学院人間環境学府附属総合臨床心理センター  
バージョン：  
権利関係：

# 幼児の発達援助に関する視点に及ぼす 臨床心理学的な知識と実践経験の影響

五位塚和也 九州大学大学院人間環境学研究院 / 山田悠未 九州大学大学院人間環境学府  
古賀 聡 九州大学大学院人間環境学研究院

## 要約

本研究は、心理学を専攻する大学生、臨床心理士養成課程を専攻する大学院生、幼児の発達援助の実践経験を有する臨床心理士を対象として、幼児と母親の相互作用場面の映像刺激の呈示を通して調査を行い、発達援助に関する視点の変容に対して臨床心理学的な知識と実践経験が及ぼす影響について検討することを目的とした。その結果、(1) 子どもの行動の背景の理解について、知識と実践経験によって不適切に見える子どもの行動に発達の意味を見出す姿勢が獲得されること、(2) 学習的な知識は子どもの行動を発達段階から理解する視点につながることで考察された。(3) 子どもへの介入について、実践経験を通して不適切な行動の減少と適切な行動の増加の双方を重視するようになることが考察された。(4) 母親への介入について、知識の獲得は日常生活の様子を母親に確認して仮説を立てるアプローチにつながり、実践経験によって子どもの行動についての理解を母親と共有するアプローチにつながることで考察された。(5) 母親の適切な努力についての認知について、臨床心理士は実践経験を経て子どもとの相互交流を促す母親の工夫に注目するようになることが考察された。

キーワード：発達援助に関する視点、臨床心理学的知識、臨床心理学的実践経験

## I. 問題

臨床心理士の職能領域の一つに地域の育児支援が挙げられる。近年では核家族化や少子化といった家族形態の変遷から幼い子どもと接することなく親になる若者も増えていることが予測される(吉川, 2003)。そのような親はわが子から表出されるサインへの適切な注意や解釈といった感性性を発揮することが難しい状態が続き、育児に対する自信のなさや育児不安につながっていることが推測される。実証的な調査からも、臨床心理学の視点から育児支援の現状と課題を検討した菊池(2007)によると、「子どもの心理的発達やことばの遅れ等に関する相談」といった子どもの発達状況に関する相談のみでなく、「子どもとのコミュニケーションの取り方に関する相談」、「子育てのなかで感じる漠然とした不安やイライラ感に関する相談」など養育者がわが子との関係のなかで抱

く悪循環に関する相談が、心理職に求められるニーズとして高かった。特に、乳幼児の発達のプロセスには、例えば他者意図の操作としてののからかいや挑発行動(Reddy, 2008)など、発達の肯定的な意味をもつ行動が養育者にとっては一見不適切な行動として捉えられ、対応に困難さを感じることもあり得る。そのため、乳幼児の発達援助の場において援助者に必要なスキルとして子どもの行動の背景を適切に理解するスキルが挙げられよう。

また、田丸(2010)は乳幼児健診などの養育者と子どもの保健福祉を目的としたフィールドでの相談においてみられる葛藤の状況として、子どもの発達の遅れや気がかりな様子に直面することで養育者の育児不安が高まる状況や、子どもにとって最善の利益を優先させながらも育児を良好に機能させることが困難な養育者に共感を寄せながら

支援していかなければならない状況が存在することを指摘した。併せて、これらの葛藤的な状況のなかでの心理相談では、養育者の事情に共感を寄せ心理的安定を図るカウンセリング的なスタンスと、子どもの育ちを支えるために親子の関わりや生活にかかわっていくコンサルテーション的なスタンスの双方が求められることも指摘した。以上を踏まえると、子どもに対する直接的な発達援助を行うことに加え、養育者と子どもの間で交わされるコミュニケーションについて理解し、それぞれの親子に適した提案を行うことも臨床心理士に求められるスキルであると考えられる。

では、そのような発達援助に関するスキルはどのように向上していくのであろうか。従来の研究では、幼稚園教育や保育などの領域の学生の幼児理解や実践に対する視点の変容を検討した研究は行われているものの(栗原・野尻, 2006; 高橋, 2008; 高橋・大瀧・今村, 2011; 高濱・阿部・佐藤, 2015), 臨床心理学の領域においては研究が少ない。しかし、発達早期の育児支援に関する臨床心理士のスキルにつながる要因について検討するためにも、臨床心理学領域における幼児の行動の背景にある心的状態の理解や育児相談の実践に関する視点の変容を研究することが求められよう。

これまでの指摘を踏まえ、本研究では、臨床心理学の領域における幼児の発達援助に関する視点として、子どもに対するアセスメントと直接的な介入の視点、養育者に対する支援に焦点を当てることとする。具体的には、子どもに対するアセスメントの視点については子どもの行動の背景にある心的状態の推測、子どもに対する直接的な介入の視点については子どもへの関わり方、養育者に対する支援として養育者への助言について変数として取り上げる。また、養育者に対するコンサルテーション的支援が求められること(田丸, 2010)を考慮すると、養育者が既に行っている工夫に対していかに注意を向けるかという点についても検討をする必要があると思われる。さらに、

臨床心理学領域における発達援助の視点の変容を検討するために、本研究では、心理学を学び始めたばかりの大学生、臨床心理学の知識と限られた実習経験を有する臨床心理士養成課程に所属する大学院生、実際の臨床現場で発達支援の実践経験を有する臨床心理士を対象者として設定し、心理臨床の実践経験を要因として検討する。

さらに、子どもの問題行動は、子どもの年齢や特性、養育者の性格や養育方針、問題行動が生起する状況的な文脈などの複雑な要因の組み合わせによって生起する。そのため、実際に発達援助の展開は、個々の養育者と子どもに合わせて具体的に検討される必要がある。したがって、本研究では母子の相互作用場面を撮影した動画を刺激として、対象者から発達援助に関する視点についてより具体的な回答を得られるよう調査方法を設定した。

以上より、本研究の目的は臨床心理学に関する知識と実践経験の違いによって、子どもの行動の背景についての推測のしかたや子どもへの関わり方、養育者への助言のしかた、養育者の適切な関わりに対する注意の向け方といった発達援助に関する視点がどのように異なるかを探索的に調査することを目的とする。

## II. 方法

### 1. 対象

調査対象は大学生群、大学院生群、臨床心理士群の3群であった。

大学生群は、A大学で心理学を専攻する大学生37名(男性7名, 女性30名, 平均年齢21.54歳,  $SD=1.07$ 歳,  $Range=20-26$ 歳)を対象とした。

大学院生群は、A大学大学院で臨床心理士の養成課程を専攻する大学院生20名(男性3名, 女性17名, 平均年齢24.45歳,  $SD=2.09$ 歳,  $Range=23-25$ 歳)を対象とした。

臨床心理士群は、乳幼児の臨床心理学的な発達援助の業務に携わったことのある臨床心理士12名

(男性3名, 女性9名, 平均年齢29.58歳,  $SD=4.06$ 歳,  $Range=25-36$ 歳)を対象とした。臨床心理士群の対象者は, 日本臨床心理士資格認定協会の認定する臨床心理士資格を有し, 1年間以上の幼児の発達相談業務の経験のある者であった。

回答に不備のある者はおらず, 全員が分析対象となった。

## 2. 映像刺激の作成

幼児と養育者の相互作用を示す動画を撮影するために, 1歳10ヶ月の女兒のいる家庭に調査を依頼した。研究の趣旨と個人情報の管理方法について保護者に文書で説明をし, 同意が得られたため, 母親と女兒の日常的なやりとりの様子を動画撮影した。本調査は発達援助に関する視点の差異を測定することを目的とするため, 動画記録のなかでも養育者が対応に困難さを感じたであろう場面を抽出した。最終的に約5分間の動画刺激を作成した。なお, 撮影された幼児は撮影時までに発達上の問題点を指摘されたことはない幼児であった。

動画刺激として抽出された場面は, 母親と女兒が隣に座りおやつを食べている場面であった。動画刺激は, 女兒がある程度おやつを食べ終わった際にお茶の入ったコップを手に取り, コップを逆さまにしてお茶をこぼし, 最後は母親が叱責しながらこぼれたお茶を布巾で拭くという場面で構成されていた。なお, 幼児がお茶をこぼし, 母親が叱責する場面は作為的に設定したのではなく, 撮影時に偶然生じた出来事であった。

## 3. 質問内容

質問は以下の4項目から構成された。なお, 回答は全て自由記述であった。

1つ目の項目は, 問題となる場面の幼児の行動の背景についてどのように推測するかを測定することが目的であった。そのため, 「映像のなかで子どもがお茶をこぼしたのはなぜだと思いますか」という質問を設定し, 空欄に回答を記入するよう求めた。以下, この項目を【子どもの行動の理由づけ】と表記する。

2つ目の項目は, 問題となる場面に自身が遭遇した際に幼児に対してどのように介入するかを測定することが目的であった。そのため, 「もし, 母親の代わりにあなたが, 映像のなかの子どもと一緒におやつを食べていたら, 子どもがお茶をこぼしたときはどのように対応しますか」と, 対象者が幼児に対して行うであろう関わりを尋ねる質問を設定し, 空欄に回答を記入するよう求めた。以下, この項目を【子どもへの介入】と表記する。

3つ目の項目は, 母親が相談者だった場合にどのように助言するかを測定することが目的であった。そのため, 「母親から子どもが食事中にお茶をこぼす行動について相談を受けたとき, どのように対応しますか。」と, 対象者が母親に対して行うであろう関わりを尋ねる質問を設定し, 空欄に回答を記入するよう求めた。以下, この項目を【母親への介入】と表記する。

4つ目の項目は, 母親が幼児とのやりとりのなかで既に行っている適切な努力や工夫に対してどのような点に注意を向けるかを測定することが目的であった。そのため, 「ビデオ映像全体を通して, 母親が子どもと関わる時にどのような工夫をしていたと思いますか」という質問を設定し, 空欄に回答を記入するよう求めた。以下, この項目を【母親の適切な努力への注意】とする。

## 4. 調査手続きと倫理的配慮

調査実施前に研究の趣旨と研究協力は任意であり, 成績評価とは無関係であること, 途中で回答を中止してもよいこと, 匿名性が保たれることを説明した後, 同意が得られた者に対して調査を実施した。研究協力への同意を得られなかった対象者はいなかった。

調査の実施は集団実施方式で行った。1回につき3名から5名ほどの対象者を集めて実施した。その際に, 調査実施中は対象者同士で会話をしないことを伝えた。

調査実施の際は, まず調査者は対象者に対して「今からある親子のやりとりを一度だけ見てもら

います。なお、子どもの月齢は生後1歳10ヶ月です。そのビデオを観た後に、ビデオに基づくいくつかの質問に回答していただきます。なので、「ビデオをよく観ておいてください」と教示し、映像刺激を呈示した。映像刺激を視聴した後に、質問紙を配布し、回答を求めた。

5. 各回答の分類とコーディング

各質問から得られた回答について、意味のまとまりごとに回答を切片化し、筆者らでKJ法による分類を行った。それぞれTable 1, Table 2, Table 3, Table 4のような分類基準が作成された。

その後、第二著者と調査の対象となっていない心理学専攻の大学生の2名で各回答を評定し、評定者間で一致しない回答は協議のうえで一致を図った。各回答についての一致率は、【子どもの

心的状態の推測】は94.96%, 【子どもへの介入】は93.24%, 【母親への介入】は89.71%, 【母親の適切な努力への注意】は87.41%であり、信頼性のある評定であったと考えられた。そのため、以下この評定に基づいて分析を行った。なお、統計学的検定には全てSPSS.22.0を使用した。

Table 1 【子どもの行動の理由づけ】の分類基準

カテゴリ名	定義	回答例
感情状態の変化	母親の関わりや、状況により、子どもの感情状態が変化したことによる理由づけをする回答。	母親とお菓子を食べて嬉しい気持ちになり、ふざけた気分になった。
母親への注意喚起	子どもが母親の注意を自分に向けようとしていることに理由づけをする回答。	母親に注目してもらうため。
物への関心	コップに対して何らかの操作を加えることに対して、子どもが理由づけをする回答。	コップをひっくり返したらどうなるのか興味を持った。
発達の未熟さ	子どもの認知・運動の発達の未熟さに理由づけをする回答。	コップを持つとして、手先の運動が未熟なのでこぼしてしまった。

Table 2 【子どもへの介入】の分類基準

カテゴリ名	定義	回答例
問題点を直接的に伝える関わり	お茶をこぼした行動が悪いということを直接的に伝える言動について言及した回答。	こぼしたらどうなるのか、何が悪いのかを説明する。
問題点を間接的に伝える関わり	子どもの行動の問題点を直接言語化せず、子ども自身に意識化させた回答。	「こぼれちゃったね〜どうしょっか?」と声かけをする。
適切な行動を伝える関わり	子どもに期待する適切な行動を伝達することによって言及した回答。	「もういらぬときはママにちょうだいとか、ごちそうさまを言って」と教える。
保護的関わり	子どもへの心配やこぼしたお茶の後片付けを自分が行うことに言及した回答。	子どもの服やテーブルを拭いてあげる。

Table 3 【母親への介入】の分類基準

カテゴリ名	定義	回答例
母親への共感的関わり	母親の否定的な感情への共感、もしくは母親の現在の子どもへの関わりを支持しに言及した回答。	「お母さんも大変でしたね」と母親の苦労をねぎらう。
子どもの行動に対する理解を伝える関わり	子どもの問題行動に対する回答者の理解を母親に伝える関わりについて言及した回答。	自分が思う「お茶をこぼした理由」について母親に伝える。
母親の理解を尋ねる関わり	子どもの行動に対する母親の理解を尋ねる関わりについて言及した回答。	女の子がお茶をこぼしたのは何故だと思っか、お母さんの考えを訊いてみる。
日常生活の確認	子どもの日常生活での行動や母親との関わりについて確認することによって言及した回答。	普段どの程度の頻度で同様の行動が起こるのか確認する。
直接的介入についての助言	子どもの行動の問題点を直接伝達することについて言及した回答。	こぼしたことを悪いことだと注意するように教えてきたら褒めるようにアドバイスをやる。
間接的介入についての助言	子どもの行動の問題点を言語化せずに子どもの行動に対処する方法を助言することによって言及した回答。	何をしたらよいのかを教え実際にやらせてみてきたら褒めるようにアドバイスを母親に伝える。
環境調整	物理的環境の調整やルールによる場面の構造化を助言する関わりについて言及した回答。	お茶を飲むとき以外は子どもからコップを遠ざけておくことを提案する。

Table 4 【母親の適切な努力への注意】の分類基準

カテゴリ名	定義	回答例
子どもへの関心	子どもに関心や注意を向けていたことに言及した回答。	子どもをよく見ていた。
母親の応答性	相互的な交流の成立のために、子どもの行動に応じて母親が行動を変化させていたことに言及した回答。	子の関わりに合わせて表情を変化させて応えている。
母親の非言語的表出の調整	非言語的な側面の表出を調整することによって子どもに意図を伝えていたことに言及した回答。	子どもにわかるように身振りを使っていた。
子どもの自発的な行動の促進	子どもの自発的な行動を促進する言動について言及した回答。	子どもが話す間を作ったり、いつもしていることを思い出させて子どもが自分でさせてやっていた。
物理的な環境調整	子どもがおやつを食べることを促すために物理的な環境調整を行っていたことに言及した回答。	おやつを食べやすいようにテーブルの上を片付けていた。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 各群における【子どもの行動の理由づけ】の各カテゴリ回答の生起頻度

【子どもの行動の理由づけ】の各カテゴリの回答の生起確率について、各群に違いがあるかを検討するため、 $\chi^2$ 検定を用いて解析を行った (Table 5)。その結果、「母親への注意喚起」について群と回答の有無に5%水準で有意な関連があることが示された ( $\chi^2 = 6.19, p < .05$ )。残差分析の結果、大学生群では「母親への注意喚起」の回答をした者が期待値よりも5%水準で有意に少なく ( $z = -2.49, p < .05$ )、回答しなかった者が期待値よりも5%水準で有意に多いこと ( $z = 2.49, p < .05$ )、大学院生群では回答した者が期待値よりも10%水準で有意に多い傾向があり ( $z = 1.78, p < .10$ )、回答しなかった者が期待値よりも10%水準で有意に少ない傾向があること ( $z = -1.78, p < .10$ )、臨床心理士群では有意な結果はなかったこと (回答あり:  $z = 1.14, n.s.$ , 回答なし:  $z = -1.14, n.s.$ ) が示された。

「発達の未熟さ」について群と回答の有無に5%水準で有意な関連があることが示された ( $\chi^2 = 9.06, p < .05$ )。残差分析の結果、大学生群では「発達の未熟さ」の回答をした者が期待値よりも5%水準で有意に少なく ( $z = -2.22, p < .05$ )、回答しなかった者が期待値よりも5%水準で有意に多いこと ( $z = 2.22, p < .05$ )、大学院生群では回答した者が期待値よりも1%水準で有意に多く ( $z =$

3.00,  $p < .01$ )、回答しなかった者が期待値よりも1%水準で有意に少ないこと ( $z = -3.00, p < .01$ )、臨床心理士群では有意な結果はなかったこと (回答あり:  $z = -0.67, n.s.$ , 回答なし:  $z = 0.67, n.s.$ ) が示された。

「感情状態の変化」、「物への関心」については有意な結果は示されなかった。

#### 2. 各群における【子どもへの介入】の各カテゴリ回答の生起頻度

【子どもへの介入】の各カテゴリの回答の生起確率について、各群に違いがあるかを検討するため、 $\chi^2$ 検定を用いて解析を行った (Table 6)。その結果、「問題点を直接的に伝える関わり」について群と回答の有無に10%水準で有意な関連がある傾向が示された ( $\chi^2 = 5.01, p < .10$ )。残差分析の結果、大学生群では「問題点を直接的に伝える関わり」の回答をした者が期待値よりも10%水準で有意に多い傾向があり ( $z = 1.83, p < .10$ )、回答しなかった者が期待値よりも10%水準で有意に少ない傾向があること ( $z = -1.83, p < .10$ )、大学院生群では回答した者が期待値よりも5%水準で有意に少なく ( $z = -2.19, p < .05$ )、回答しなかった者が期待値よりも5%水準で有意に多いこと ( $z = 2.19, p < .05$ )、臨床心理士群では有意な結果はなかったこと (回答あり:  $z = 0.21, n.s.$ , 回答なし:  $z = -0.21, n.s.$ ) が示された。

「適切な行動を伝える関わり」について群と回答の有無に5%水準で有意な関連があることが示

Table 5 各群における【子どもの行動の理由づけ】の下位カテゴリ回答の生起頻度

	大学生群 (n=37)		大学院生群 (n=20)		臨床心理士群 (n=12)		計 (n=69)		$\chi^2$
	回答あり (%)	回答なし (%)	回答あり (%)	回答なし (%)	回答あり (%)	回答なし (%)	回答あり (%)	回答なし (%)	
感情状態の変化	8 (21.62)	29 (78.38)	6 (30.00)	14 (70.00)	3 (25.00)	9 (75.00)	17 (24.64)	52 (75.36)	$\chi^2 = 4.9$ n.s.
母親への注意喚起	21 (56.76)	16 (43.24)	17 (85.00)	3 (15.00)	10 (83.33)	2 (16.67)	48 (69.57)	21 (30.43)	$\chi^2 = 6.19$ $p < .05$
物への関心	21 (56.76)	16 (43.24)	9 (45.00)	11 (55.00)	9 (75.00)	3 (25.00)	39 (56.52)	30 (43.48)	$\chi^2 = 2.75$ n.s.
発達の未熟さ	8 (21.62)	29 (78.38)	12 (60.00)	8 (40.00)	3 (25.00)	9 (75.00)	23 (33.33)	46 (66.67)	$\chi^2 = 9.06$ $p < .05$

された ( $\chi^2 = 7.01, p < .05$ )。残差分析の結果、大学生群では「適切な行動を伝える関わり」の回答について有意な結果はなかったこと (回答あり:  $z = -0.48, n.s.$ , 回答なし:  $z = 0.48, n.s.$ )、大学院生群においても有意な結果はなかったこと (回答あり:  $z = -1.56, n.s.$ , 回答なし:  $z = 1.56, n.s.$ )、臨床心理士群では回答した者が期待値よりも5%水準で有意に多く ( $z = 2.50, p < .05$ )、回答しなかった者が期待値よりも5%水準で有意に少ないこと ( $z = -2.50, p < .01$ ) が示された。

「問題点を間接的に伝える関わり」、「保護的関わり」については有意な結果は示されなかった。

### 3. 各群における【母親への介入】の各カテゴリー回答の生起頻度

【母親への介入】の各カテゴリーの回答の生起

確率について、各群に違いがあるかを検討するため、 $\chi^2$ 検定を用いて解析を行った (Table 7)。その結果、「子どもの行動に対する理解を伝える関わり」について群と回答の有無に5%水準で有意な関連があることが示された ( $\chi^2 = 8.44, p < .05$ )。残差分析の結果、大学生群では「子どもの行動に対する理解を伝える関わり」の回答をした者が期待値よりも5%水準で有意に少なく ( $z = -2.47, p < .05$ )、回答しなかった者が期待値よりも5%水準で有意に多いこと ( $z = 2.47, p < .05$ )、大学院生群では有意な結果はなかったこと (回答あり:  $z = 0.58, n.s.$ , 回答なし:  $z = -0.58, n.s.$ )、臨床心理士群では回答をした者が期待値よりも5%水準で有意に多く ( $z = 2.55, p < .05$ )、回答しなかった者が期待値よりも5%水準で有意に少ないこと

Table 6 各群における【子どもへの介入】の下位カテゴリー回答の生起頻度

	大学生群 (n=37)		大学院生群 (n=20)		臨床心理士群 (n=12)		計 (n=69)		$\chi^2$
	回答あり (%)	回答なし (%)	回答あり (%)	回答なし (%)	回答あり (%)	回答なし (%)	回答あり (%)	回答なし (%)	
問題点を直接的に伝える関わり	33 (89.19)	4 (10.81)	13 (65.00)	7 (35.00)	10 (83.33)	2 (16.67)	56 (81.16)	13 (18.84)	$\chi^2=5.01$ $p<.10$
問題点を間接的に伝える関わり	18 (48.65)	19 (51.35)	13 (65.00)	7 (35.00)	6 (50.00)	6 (50.00)	37 (53.62)	32 (46.38)	$\chi^2=1.47$ $n.s.$
適切な行動を伝える関わり	21 (56.76)	16 (43.24)	9 (45.00)	11 (55.00)	11 (91.67)	1 (8.33)	41 (59.42)	28 (40.58)	$\chi^2=7.01$ $p<.05$
保護的関わり	16 (43.24)	21 (56.76)	8 (40.00)	12 (60.00)	7 (58.33)	5 (41.67)	31 (44.93)	38 (55.07)	$\chi^2=1.11$ $n.s.$

Table 7 各群における【母親への介入】の下位カテゴリー回答の生起頻度

	大学生群 (n=37)		大学院生群 (n=20)		臨床心理士群 (n=12)		計 (n=69)		$\chi^2$
	回答あり (%)	回答なし (%)	回答あり (%)	回答なし (%)	回答あり (%)	回答なし (%)	回答あり (%)	回答なし (%)	
母親への共感的関わり	8 (21.62)	29 (78.38)	6 (30.00)	14 (70.00)	4 (33.33)	8 (66.67)	18 (26.09)	51 (73.91)	$\chi^2=.87$ $n.s.$
子どもの行動に対する理解を伝える関わり	8 (21.62)	29 (78.38)	8 (40.00)	12 (60.00)	8 (66.67)	4 (33.33)	24 (34.78)	45 (65.22)	$\chi^2=8.44$ $p<.05$
母親の理解を尋ねる関わり	5 (13.51)	32 (86.49)	4 (20.00)	16 (80.00)	4 (33.33)	8 (66.67)	13 (18.84)	56 (81.16)	$\chi^2=2.35$ $n.s.$
日常生活の確認	6 (16.22)	31 (83.78)	13 (65.00)	7 (35.00)	7 (58.33)	5 (41.67)	26 (37.68)	43 (62.32)	$\chi^2=15.80$ $p<.01$
直接的介入についての助言	20 (54.05)	17 (45.95)	3 (15.00)	17 (85.00)	5 (41.67)	7 (58.33)	28 (40.58)	41 (59.42)	$\chi^2=5.57$ $p<.10$
間接的介入についての助言	20 (54.05)	17 (45.95)	9 (45.00)	11 (55.00)	7 (58.33)	5 (41.67)	36 (52.17)	33 (47.83)	$\chi^2=.65$ $n.s.$
環境調整	4 (10.81)	33 (89.19)	1 (5.00)	19 (95.00)	2 (16.67)	10 (83.33)	7 (10.14)	62 (89.86)	$\chi^2=1.16$ $n.s.$

( $z = -2.55, p < .05$ ) が示された。

「日常生活の確認」について群と回答の有無に5%水準で有意な関連があることが示された ( $\chi^2 = 15.80, p < .01$ )。残差分析の結果、大学生群では「日常生活の確認」の回答をした者が期待値よりも1%水準で有意に少なく ( $z = -3.96, p < .01$ )、回答しなかった者が期待値よりも1%水準で有意に多いこと ( $z = 3.96, p < .01$ )、大学院生群では回答をした者が期待値よりも1%水準で有意に多く ( $z = 2.99, p < .01$ )、回答しなかった者が期待値よりも1%水準で有意に少ないこと ( $z = -2.99, p < .01$ ) 臨床心理士群では有意な結果はなかったこと (回答あり:  $z = 1.62, n.s.$ , 回答なし:  $z = -1.62, n.s.$ ) が示された。

「直接的介入についての助言」について群と回答の有無に10%水準で有意な関連がある傾向が示された ( $\chi^2 = 5.57, p < .10$ )。残差分析の結果、大学生群では「直接的介入についての助言」の回答をした者が期待値よりも10%水準で有意に多い傾向があり ( $z = 1.81, p < .10$ )、回答しなかった者が期待値よりも10%水準で有意に少ない傾向があること ( $z = -1.81, p < .10$ )、大学院生群では回答をした者が期待値よりも5%水準で有意に少なく ( $z = -2.34, p < .05$ )、回答しなかった者が期待値よりも5%水準で有意に多いこと ( $z = 2.34, p < .05$ )、臨床心理士群では有意な結果はなかったこと (回答あり:  $z = 0.43, n.s.$ , 回答なし:  $z =$

$-0.43, n.s.$ ) が示された。

「母親への共感的関わり」、「母親の理解を尋ねる関わり」、「間接的介入についての助言」、「環境調整」については有意な結果は示されなかった。

#### 4. 各群における【母親の適切な努力への注意】の各カテゴリー回答の生起頻度

【母親の適切な努力への注意】の各カテゴリーの回答の生起確率について、各群に違いがあるかを検討するため、 $\chi^2$ 検定を用いて解析を行った (Table 8)。その結果、「母親の応答性」について群と回答の有無に5%水準で有意な関連があることが示された ( $\chi^2 = 6.71, p < .05$ )。残差分析の結果、大学生群では「母親の応答性」の回答をした者が期待値よりも5%水準で有意に少なく ( $z = -1.99, p < .05$ )、回答しなかった者が期待値よりも1%水準で有意に多いこと ( $z = 1.99, p < .05$ )、大学院生群では有意な結果はなかったこと (回答あり:  $z = 0.16, n.s.$ , 回答なし:  $z = -0.16, n.s.$ )、臨床心理士群では回答をした者が期待値よりも5%水準で有意に多く ( $z = 2.42, p < .05$ )、回答しなかった者が期待値よりも5%水準で有意に少ないこと ( $z = -2.42, p < .05$ ) が示された。

「子どもへの関心」、「母親の非言語的表出の調整」、「子どもの自発的な行動の促進」、「物理的な環境調整」については有意な結果は示されなかった。

Table 8 各群における【母親の適切な努力への注意】の下位カテゴリー回答の生起頻度

	大学生群 (n=37)		大学院生群 (n=20)		臨床心理士群 (n=12)		計 (n=69)		$\chi^2$
	回答あり (%)	回答なし (%)	回答あり (%)	回答なし (%)	回答あり (%)	回答なし (%)	回答あり (%)	回答なし (%)	
子どもへの関心	24 (64.86)	13 (35.14)	15 (75.00)	5 (25.00)	7 (58.33)	5 (41.67)	46 (66.67)	23 (33.33)	$\chi^2 = 1.05$ n.s.
母親の応答性	12 (32.43)	25 (67.57)	9 (45.00)	11 (55.00)	9 (75.00)	3 (25.00)	30 (43.48)	39 (56.52)	$\chi^2 = 6.71$ $p < .05$
母親の非言語的表出の調整	11 (29.73)	26 (70.27)	8 (40.00)	12 (60.00)	3 (25.00)	9 (75.00)	22 (31.88)	47 (68.12)	$\chi^2 = .95$ n.s.
子どもの自発的な行動の促進	18 (48.65)	19 (51.35)	10 (50.00)	10 (50.00)	9 (75.00)	3 (25.00)	37 (53.62)	32 (46.38)	$\chi^2 = 2.68$ n.s.
物理的な環境調整	11 (29.73)	26 (70.27)	6 (30.00)	14 (70.00)	2 (16.67)	10 (83.33)	19 (27.54)	50 (72.46)	$\chi^2 = .86$ n.s.



#### IV. 考察

##### 1. 臨床心理学的な知識と実践経験が子どもの行動の背景の推測に与える影響

調査結果より、【子どもの行動の理由づけ】については「母親への注意喚起」において、大学生群の回答率は低く、優位傾向ではあるものの大学院生群の回答率が高かった。また、統計的に有意な結果は得られていないものの臨床心理士群でも回答率の高い項目である。Reddy (2008) は子どもが養育者の注意を操作しようとする行動としてのからかいや挑発が生後 9 ヶ月頃より広くみられるようになることを示しているが、「母親への注意喚起」はお茶をこぼす行動を母親の関わりを意図的に引き出す行動として認知していることを示す項目であり、子どもの行動をからかいや挑発であると認知している項目であると考えられる。したがって、本研究の結果は、臨床心理学の知識や経験を積むなかで、幼い幼児であっても意図的に他者から自身に対する注意を喚起する行動をとり、それがしばしば不適切な形で生じることを理解するようになることを示していると思われる。他者意図の操作は社会性の発達に関する非常に重要な意味をもっているが、一見不適切に見える行動の背景に発達の意味や適応的な意味を見出す姿勢は、臨床心理学に関する知識と実践経験を通して獲得されるものであることが推察される。

一方で、「発達の未熟さ」においては、大学生群の回答率は低く、大学院生群は回答率が高かった。高橋ら (2010) は幼稚園教育実習生を対象として、実習生にとって子どもの個別的な発達の特徴を理解することは少ないが、事前学習の習熟度が高い者は実習を通して年齢による平均的な発達については理解を深めることが多いことが示されている。本研究の見解も高橋ら (2010) の結果と同様に、大学院生群は「手先の運動が未熟なのでこぼしてしまった」などの発達段階を意識した回答が多かった。一方で、臨床心理士群では統計的に有意な結果は得られていないが、発達段階を意

識した回答は少なかった。以上の結果より、大学院生のように臨床心理学に関する学習的知識を獲得することで子どもの行動を発達段階という新たな視点で捉えるようになるが、臨床心理士の現場での実践的な経験を経た者は年齢による平均的な発達よりも個々の幼児の特徴に目を向けるようになるのかもしれない。

##### 2. 臨床心理学的な知識と実践経験が子どもへの介入に与える影響

【子どもへの介入】については、「問題点を直接的に伝える関わり」において、有意傾向ではあるものの大学生群では回答率が高く、大学院生群では有意に回答率が低かった。一方で、「適切な行動を伝える関わり」においては、臨床心理士群のみで有意に回答率が高いことが示された。以上の結果から、大学院生は臨床心理学に関する学習的知識の獲得や実習経験によって、心理臨床的な実践において重要視される受容的共感的態度で子どもに介入しようとするようになるために、問題点を指摘して不適切な行動を消去する関わりが減少すると考えられる。さらに、臨床心理士群の「適切な行動を伝える関わり」の回答率が高いことより、実践経験を通して子どもの発達支援においては社会的に不適切な行動の減少を目指すことも重要である一方で、適切な行動の増加を目指す視点も重要であることが理解されるようになっていくことが推察される。不適切な行動の消去と適切な行動の強化は応用行動分析において特徴的なアプローチであるが (山本・加藤, 1997), 幼児の発達支援の実践を展開するなかで応用行動分析のような現実的なアプローチの有効性が実感され、適切な行動を明確に伝えるという関わりかたが獲得されている可能性も考えられる。

##### 3. 臨床心理学的な知識と実践経験が母親への介入に与える影響

【母親への介入】については、大学生群については有意傾向ではあるものの子どもの問題点を直接伝えるよう助言する「直接的介入についての助

言」を選択しやすく、大学院生群では母親に日常生活での子どもの様子を確認する「日常生活の確認」を選択しやすく、臨床心理士群では子どもの問題行動に対する理解を母親に伝える「子どもの行動に対する理解を伝える関わり」を選択しやすことが示された。大学生については、【子どもへの介入】の結果と同様に直接的に子どもに対して問題点を指摘することを肯定する視点を有していることがうかがえる。大学院生については日常生活の子どもの様子について情報収集をしようとする関わりが多く、大学院生においては情報収集することによって幼児の行動に対する仮説を明確にしようとしていることが考えられる。一方で、臨床心理士は子どもの行動に対する自身の仮説を母親に伝える関わりが多いという結果から、既に明確化された子どもの行動に対する仮説を伝えることで母親と問題の解決について話し合う姿勢を有していることが考えられる。以上より、大学院生は臨床心理学に関する知識や実習経験から子どもの行動に対する探索的な態度をもつようになり、臨床心理士としての実践経験を経ることで子どもの行動に対する視点が明確化されるようになり、自身の仮説を母親に伝えて相互的理解を図ろうとするようになるプロセスが推察される。

#### 4. 臨床心理学的な知識と実践経験が母親の適切な努力に対する注意の向け方に与える影響

【母親の適切な努力への注意】については、大学生群では回答率が低く、臨床心理士群では回答率が高いことが示された。また、大学院生群の回答率は大学生群と臨床心理士群の中間に位置していた。「母親の応答性」は他の下位カテゴリーと異なり、「子の関わりに合わせて表情を変化させて応えている」など、子どもの反応に応じて母親が自身の表出スタイルを変化させてやりとりを維持しようとしているといった、母親から子どもへの関わりだけでなく子どもから母親への関わりも含めた相互的な交流に注目した回答である。つまり、臨床心理学に関する知識と実践経験を踏まえ

るにつれて、子どもと母親の相互的な交流に関心を強く向けるようになると考えられる。田丸(2010)は乳幼児の発達支援について、子どもの発達状況や特性といった子ども側の要因と、養育者の生活歴や特性といった養育者側の要因の双方に着目しながら支援をすることの必要があることを述べたが、本研究の結果は心理臨床実践経験が子どもと養育者の双方への関心と両者の相互交流を促進する工夫への注目につながることを示した知見であると言えよう。

#### 5. 本研究の限界と今後の課題

本研究では、心理臨床実践経験が発達支援的な視点の差異に影響を及ぼすことについて探索的に明らかにしたが、本研究における調査に使用された映像刺激は1組の親子の相互作用場面であった。そのため、子どもが異なる年齢層であった場合や、発達の遅れや偏りを示す子どもと養育者の相互作用場面であった場合に、本研究で得られた知見の信頼性を検討することが必要であると思われる。また、本研究では、子どもや母親の行動の認知、子どもや母親への介入を選択に対して、それぞれの対象者がどのような経験を根拠としていたのかということについては本研究で明らかにできていない。そのため、今後の研究では、どのような経験をしたことが対象者の発達援助に関する視点の差異に影響を及ぼしたかを検討するために、対象者が回答する際に意識した経験的根拠も含めて調査をすることで、臨床心理士の養成課程において有効な教育を検討するためのより有用な知見を得られるであろう。さらに、今回の調査対象者が臨床心理学の領域に限定されていたため、本研究の知見が臨床心理学領域に特有であるのか、幼稚園教育や保育の領域においても同様の結果が得られるのかを検討できていない。そのため、臨床心理学領域の対象者のみでなく、教育や保育といった子どもの発達を専門とする他領域の対象者と比較することも今後の課題と言える。

## 付記

本稿は2014年度の九州大学教育学部心理学実験Ⅱの調査結果をもとに執筆したものであり、本研究は著者らの他に九州大学教育学部2015年度卒の和田理紗子氏も含めた研究チームによって行われたものです。調査にご協力いただきました方々、および和田理紗子氏にここで感謝の意を申し上げます。

## 文献

- 菊池麻由 (2007). 臨床心理学的子育て支援の現状と課題. 岩手大学大学院人文社会科学部研究科紀要, 16, 19-37.
- 栗原泰子・野尻裕子 (2006). 幼稚園教育実習における実習生の幼児理解について: 意識化された具体的な内容の分析から. 川村学園女子大学研究紀要, 17 (2), 1-10.
- 小原倫子 (2005). 母親の情動共感性及び情緒応答性と育児困難観との関連. 発達心理学研究, 16, 92-102.
- Reddy, V. (2008). How infants know minds. Cambridge, Mass: Harvard University Press.
- 高濱正文・阿部敬信・佐藤慶子 (2015). 遊びの中で子どもは何を学んでいるのか: 保育実践のビデオ映像を基に学びを深める. 別府大学短期大学部紀要, 34, 31-42.
- 高橋真由美 (2008). 幼稚園教育実習における学生の学びに関する一考察: 幼児理解に着目して. 藤女子大学紀要, 45, 77-82.
- 高橋裕子・大瀧ミドリ・今村聡美 (2010). 幼稚園教育実習における事前準備の習熟度と事後の自己評価について: 「教材研究」「子どもの気持ちの読み取り」「満足度の観点」から. 東京家政大学紀要, 51, 7-13.
- 山本淳一・加藤哲文 (1997). 応用行動分析学入門—障害児者のコミュニケーション行動の実現を目指す. 学苑社.
- 吉川昌子 (2003). 幼児をもつ父親と母親の養育態度と育児不安との関連. 中村学園研究紀要, 35, 47-53.
- 田丸尚美 (2010). 乳幼児健診と心理相談. 東京: 大月書店.

**The influence of the knowledge and practical experience of  
clinical psychology on perspectives regarding the provision of  
developmental support for infants**

Kazuya GOITSUKA

Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

Yumi YAMADA

Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

Satoshi KOGA

Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

The purpose of this research was to consider the influence of the knowledge and practical experience of clinical psychology on perspectives regarding the provision of developmental support to infants. Subjects were 37 university students majoring in psychology, 20 graduate students from a clinical psychologist training course, and 12 clinical psychologists with practice experience of providing developmental support for infants. Findings revealed that an inclination to identify the developmental meaning of inappropriate infant behavior was acquired through the knowledge and practical experience of clinical psychology, and that the knowledge led to a deeper understanding of developmentally appropriate infant behavior. With reference to interventions for infants, the clinical psychologists focused on both, the reduction of inappropriate behaviors and the increase of appropriate behaviors. For interventions for mothers, the knowledge of clinical psychology led to the approach of collecting information from the mother, while the practical experience led to sharing an understanding of the infant's behavior with the mother. For recognition of the appropriate efforts of mothers, clinical psychologists tended to direct attention to the involvement of the mother to promote interactions with the infant.

Keywords: perspectives on developmental support, knowledge of clinical psychology,  
experience of clinical psychology